岩手・志羅山（しらやま）遺跡

1　所在地　岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山

2　調査期間　一　一九九六年（平8）六月～七月

二　一九九六年六月

3　発掘機関　平泉町教育委員会

4　調査担当者　菅原計二

5　遺跡の種類　集落跡

6　遺跡の年代　一二世紀

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

志羅山遺跡は平泉町の中心市街地の南側に位置し、ＪＲ東北本線平泉駅の西側三〇〇ｍの付近を中心として、東西五〇〇ｍ、南北五〇〇ｍのおよそ一九万㎡の広がりを持つ遺跡である。遺跡地内には平泉町役場や郵便局、銀行、農協などの公共的施設が集中している。

（一　関）

当遺跡は西に特別史跡毛越寺跡・観自在王院跡と倉町遺跡、東に泉屋遺跡、北に花立Ⅱ遺跡、鈴沢の池跡が接しており、南は北上川の支流である太田川が東流する。付近の標高は二二～三三ｍほどである。

志羅山遺跡は柳之御所跡に次ぐ調査次数を重ね、一二世紀の奥州藤原氏を主体とした時代の建物跡や遺物が密集する地域であることが確認されているが、近年の調査では中世や近世以降と考えられる遺構・遺物の検出例も増加している。

一　第六一次調査

第六一次調査区は、平泉駅の西側一〇〇ｍの地点に位置し、一二世紀後半の掘立柱建物や井戸、土坑、溝、焼土遺構などが検出された。遺物はかわらけ、中国産磁器、国産陶器、鋳型、木製品が出土した。木簡(1)(2)は、四号土坑から出土した。四号土坑は直径〇・七ｍの円筒状を呈する便所遺構とみられる。五号土坑と重複し、四号土坑が新しい。両遺構ともに下層泥質粘土の覆土から瓜類の種を出土した。二基の土坑底面には、いずれも大形の手づくねかわらけが正位で置かれていたが、これは便所廃棄の際の埋納行為と考えられる。遺構の年代は一二世紀第４四半期である。

二　第六二次調査

第六二次調査区は、ＪＲ平泉駅の西側四〇〇ｍの地点に位置する。一〇〇㎡に満たない小規模な調査区から井戸、溝、不整形落ち込み、柱穴少数を検出した。(3)は、一号井戸の上層から出土した。井戸の

半分が調査区域外となり、検出面から一mの掘り下げに止めたが、かわらけ、木製品、国産陶器が出土した。井戸は人為的な埋め戻しが行なわれている。遺構の年代は一二世紀後半である。

8　木簡の釈文・内容

一　第六一次調査

(1)

・「□

この　□□□か□□ト□しアシナ□□□ト」

・「□　よ□　□

□□□二年□」

262×23×6　051

(2)

乃　〔天ヵ〕

ハ□か

091

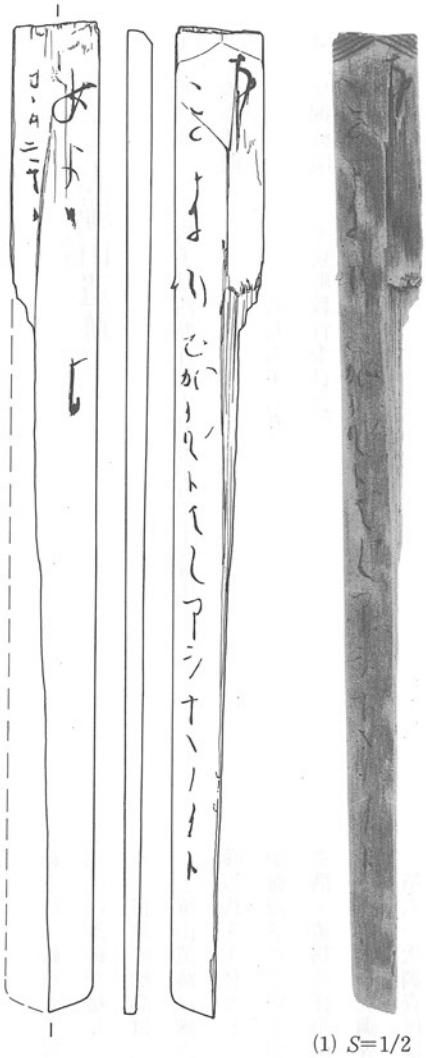
二　第六二次調査

(3)

・「□」

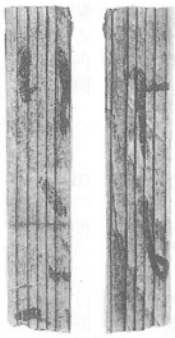
・「□」

(87)×(18)×3　081



(1) S=1/2

(2) 実寸



(3) S=1/2

(1)は、細長い薄板で、平坦な上端の両側を小さく斜めに切り落とし、下端は緩い角度で削られる。板の上端はやや厚く、下端はやや薄くなる。下位の半分を欠損するが、対称形と考えられる。

(3)は、細長い薄板の破片である。上端の平坦面が残るが、左右両端と下端を欠く。

9 関係文献

平泉町教育委員会『平泉遺跡群発掘調査報告書』六三（一九九七年）

同『平泉遺跡群発掘調査報告書』六四（一九九七年）

（菅原計二）

多賀城市文化財調査報告書第四五集

『山王遺跡Ⅰ—仙塩道路建設に係る発掘調査報告書—』の刊行

多賀城市埋蔵文化財調査センターが継続して調査している山王遺跡では、これまでに弥生時代・古墳時代前期の水田、古墳時代中・後期の集落、奈良平安時代の町並み、中世の屋敷跡などが発見されている。本書は、かかる調査結果を収録する第一分冊である。付章として、一九九〇・九二年度に実施した第一〇次・第一七次調査で出土した漆紙文書と木簡に関する考察を掲載する。既に昨年『山王遺跡—第一七次調査—出土の漆紙文書』が刊行済みであるが、今回は、第一〇次調査出土漆紙文書（表に戸口損益帳の草案、紙背に「百済王敬福」とあるものと具注暦）二点と、両次調査出土木簡五点を加えたもので、本遺跡出土の漆紙文書を一覧するのに至便である。

多賀城市埋蔵文化財調査センター編集
多賀城市教育委員会発行　一九九七年三月刊
本文二三八頁、図版二八〇頁、付図六枚、A四版
頒価三〇〇〇円、送料五二〇円
問い合わせ先　多賀城市埋蔵文化財調査センター
〒九八五　多賀城市中央二丁目二七—一
TEL　〇二二—三六八—〇一三四